

## 大学での講義中のスマートフォンの私的使用

—その頻度と内容—

寺尾 敦  
Atsushi TERAO

伊藤 一成  
Kazunari ITO

青山学院大学  
Aoyama Gakuin University

**あらまし**：本研究では、大学での授業中に、学生がどれほどの頻度でスマートフォンを操作しているのか、何をしているのかを調査した。大教室での講義形式の授業で、4週間にわたって調査を行った。調査に回答した学生のほとんどが、主にSNSやメールでのメッセージのやり取りのために、スマートフォンを使用していた。スマートフォンの不用意な使用を抑制するウェブシステムを用いることの効果は限定的であった。

**キーワード**：スマートフォン SNS コミュニケーション ピクトグラム 大学教育

### 1 はじめに

多くの大学生がスマートフォンを所持している。2013年8月にビデオリサーチインタラクティブが実施した調査 [1] によれば、男子学生のスマートフォン所持率は72.0%、女子学生では81.7%であった。

大学での授業中に学生が携帯端末を操作しているという光景は以前から見られたが、多くの学生がスマートフォンを持つようになって、こうした行為はさらに多くなったように感じられる。SNSの普及も、こうした行為を増加させているかもしれない。

本研究では、大学での授業中に、学生がどれほどの頻度でスマートフォンを操作しているのか、何をしているのかを調査した。受講者が100人を超える、大教室での講義形式の授業で、4週間（4回の講義）にわたって調査を行った。

学生が授業中にスマートフォンを使用するのは、明確な意図があるわけではなく、なんとなく操作しているのかもしれない。そこで、4回実施した調査のうち2回は、スマートフォンの不用意な利用を抑制することを試みた。GOSEICHOと名付けられた、ピクトグラムを用いたウェブアプリケーション [2] を利用した。スマートフォンのブラウザでgoseicho.comにアクセスすると、スマートフォンを裏返しにして机の上に置くように促される。表を向けて使おうとすると、「ご静聴ありがとうございます」という、使用を抑制するメッセージが流れる。ブラウザを終了させるとシステムへのアクセスは切れる。

### 2 方法

#### 2.1 調査実施日

青山学院大学社会情報学部において、2年次以降の選択科目として開講されている「学習心理学」の15回の講義のうち、第5回からの連続した4回（2013年10月24日、10月31日、11月7日、11月14日）で調査を実施した。講義担当は第1著者であった。

#### 2.2 調査対象者

学習心理学の履修者127名のうち、調査を実施した講義に出席しており、調査への協力依頼に同意した学生が調査票への回答を行った。授業への出席者は、第5回が110名、第6回が106名、第7回が106名、第8回が104名であった。調査への回答者はそれぞれ、99名、97名、93名、45名であった。

#### 2.3 調査項目

最初の2回の調査では、スマートフォンの所持、遅刻の有無、講義中にスマートを使用した回数（「一度もしていない」「1回から3回」「4回から6回」「7回以上」の4択）、使用した場合の用途をたずねた。最後2回の調査では、これら調査項目に加えて、GOSEICHOシステムへのアクセスの有無、アクセスしなかった（できなかった）場合の理由、このシステムについての感想あるいは意見をたずねた。

#### 2.4 調査手続き

調査は無記名で行われた。各回の講義において、講義の最後に調査票を配布し、回答を依頼した。調査への協力依頼があることは予告されなかった。

表1 授業中のスマートフォンの使用頻度 (%)

| 講義回 | 使用<br>せず  | 1回<br>～3回 | 4回<br>～6回 | 7回<br>以上  |
|-----|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 第5回 | 6.1 (5)   | 32.9 (27) | 31.7 (26) | 29.3 (24) |
| 第6回 | 6.0 (5)   | 41.7 (35) | 22.6 (19) | 29.8 (25) |
| 第7回 | 13.3 (10) | 38.7 (29) | 21.3 (16) | 26.7 (20) |
| 第8回 | 23.7 (9)  | 42.1 (16) | 26.3 (10) | 7.9 (3)   |

Note. かつこ内は度数

4回の調査のうち後半の2回では、講義の最初にGOSEICHOへのアクセスを依頼した。3回目の調査では、アクセス後はシステムの指示に従うようにとだけ教示した。この回の調査で、このシステムが何なのかよくわからないという回答がいくつかあったため、第4回の調査ではシステムの目的(不用意な使用の抑制)と動作について説明を行った。スマートフォンの使用を禁止はしないこと、ブラウザを閉じてしまうことは自由であることを伝えた。

### 3 結果と考察

以下の分析では、遅刻者と、スマートフォンを所持していなかった学生を分析から除外した。4回の調査での分析対象者はそれぞれ、82人、84人、75人、38人となった。

#### 3.1 スマートフォンの使用頻度

教室にスマートフォンを持ってきていた学生のうち、多くの学生が授業中にスマートフォンを使用していた。各回の調査において、「一度もしていない」「1回から3回」「4回から6回」「7回以上」という4カテゴリそれぞれを選択した回答者の割合(%)を表1に示す。GOSEICHOシステムを使用していない前半2回の調査ではおよそ95%、システムを使用した後半2回の調査ではおよそ90%の学生が、授業中に少なくとも1回スマートフォンを使用していた。最終回の調査を除き、スマートフォンの使用が7回以上と回答した学生はおよそ30%にもなった。

第8回講義では、調査に応じなかった学生の割合が高かった(回収率43%)。回答者のうち、スマートフォンの使用回数が7回以上だった学生の割合が非常に低くなっていることから、授業中にスマートフォンを

頻繁に使用する学生が調査への協力を拒否したと考えられる。こうした学生の多くは、スマートフォンの使用を抑制されることに反発したのかもしれない。

#### 3.2 スマートフォンの使用目的

スマートフォンの用途のほとんどは、SNSあるいはメールでのメッセージのやり取りであった。SNSでメッセージをやり取りしたと記述した学生は、初回から4回目の調査でそれぞれ、42.7% (35人)、60.7% (51人)、43.0% (40人)、39.5% (15人)であった。メールでメッセージをやり取りしたと記述した学生は、初回から4回目の調査でそれぞれ、20.7% (17人)、23.8% (20人)、21.5% (20人)、18.4% (7人)であった(SNS使用者との重複あり)。

#### 3.3 不用意な使用への介入効果

GOSEICHOシステムを使用しても、スマートフォンの使用はほとんど抑制されなかった。スマートフォンを使用しなかった学生はわずかに増加(5%程度)しただけであった。授業中にスマートフォンを使用する学生の多くは、不用意に使用している(注意を促されれば使用しない)のではなさそうである。少なくとも、授業中はSNSやメールの使用を控えようという意識はあまりなさそうである。

ただし、非常に少数だが、GOSEICHOシステムの介入により、授業中にスマートフォンを使用しなくなる学生は存在するかもしれない。3回目の調査で、GOSEICHOシステムの使用について、「スマートフォンを使わなくなるので、授業などで使うのは効率がよいと思いました」という意見を記述した学生がいた。明確な意図がなくスマートフォンを不用意に使用している学生は少数だが、そうした学生には、このシステムによる介入効果があるかもしれない。

#### 参考文献

- [1] 株式会社ビデオリサーチインタラクティブ、「プレスリリース」(2013年9月5日)  
<http://www.videoi.co.jp/release/20130905.html> (2014年1月31日アクセス)。
- [2] 伊藤一成、“スマートフォンやタブレットの不用意な利用を抑制するシステム GOSEICHO の試作” 情報処理学会研究報告、Vol.2013-CE-121、No.16、pp.1-6、2013年10月。